



## 主張

# 意義ある活動として大切にしたい

宮崎 徹

韓国のピョンチャンで冬季のオリンピック、パラリンピックが開催されてから半年近くが過ぎました。どちらも目標を上回るメダル獲得で、大変な盛り上がりを見せた大会となりました。けがで出場が危ぶまれた羽生選手や前回のオリンピックの挫折感からの挑戦となった高梨選手、スケート界では初めての中学生オリンピック代表となり、期待されつつも前回のオリンピックには出場することもできなかった高木美保選手などの逆境を乗り越えての活躍も大きかったと思います。さらに、スピードスケートの小平奈緒選手の五〇〇mの競技ではオリンピック新記録を出し会場が歓声に包まれる中、ライバルであり、オリンピック2連覇中の韓国のイサンファ選手の滑走のために会場を静めたしぐさに心打たれた人も多かったと思います。その後のインタビュー等のコメントでも、「勝つことを目標に取り組んでいるけれど、勝つことだけで終わることなく、常に学び続けている」という姿勢に多くの人々が心を熱くしたのだと思います。今回の大会ではメダル獲得への賞賛とともに、そこに至るまでの紆余曲折の過程を乗り越えてきた選手の思いがあるからこそそこに残るオリンピックになったのだと思います

さて、中学校の部活動もいよいよよまとめの時期が迫ってきました。全国の頂点を目指し



た挑戦が始まっています。それぞれが目標をもって時には辛く苦しい練習にも積極的に取り組み、高めてきた心と技で、悔いの残らぬように力を発揮してほしいと願っています。オリンピックのような華やかさがあるわけではありませんが、それでもそこに至る過程に関わってきたものにとっては、オリンピックにも劣ることのないドラマが見えてきます。中学校入学まで全く経験がなかった生徒たちが、顧問の先生の指導により競技ができるまでに成長していくのです。そして、レギュラーになれなくても毎日真面目に練習に取り組む生徒や能力がありながらもひたむきな取組ができない生徒、部活動をやめれば生活がどうなってしまうか分からない生徒など、どの学校にもいるのではないのでしょうか。そんな様々な取組が見られる活動ですが、それでも多くの学びが生まれるとともに、引退を迎える頃には、ほとんどの生徒が「取り組んできてよかった」と言えるようになるのです。

現在は教員の多忙化解消の一つとして、部活動の運営の在り方が話題になっていますが、これまでも「加熟する部活動」「勝利至上主義の部活動」などの問題点が浮かび上がり、その度に技能向上ばかりを目指しすぎてきた取組を見直し、成果を上げてきたと思います。今回の指摘についても趣旨をよく理解し、教師にとっても、生徒にとっても望ましい部活動の在り方について知恵を出して行くことが求められていると思います。これまで果たしてきた部活動の教育的な意義を失うことなく、今後においても、「生徒にとって意義ある部活動」として取り組まれていくことを切に願っています。

(全日中副会長・前橋市立第五中学校長)